

水辺環境の保全

江崎保男・田中哲夫編 朝倉書店 5,800円.

今年2月、環境庁のレッドデータブックにメダカが掲載されるというニュースが報じられた。このニュースが衝撃的であったのは、どこか遠くの話しに思われやすい絶滅の危機という出来事が、最も身近だった生き物にさえ及んでいるという現実を明示したからに他ならない。メダカに限らず、かつて水田や農業用水路などでふつうに見られた動植物のなかには、すでにレッドリストに並べられている種も少なくない。鳥類も例外ではなく、かつて最も優占するサギであったチュウサギの衰退はその象徴でもある。このように身近な生物の危機が増してきたのは、農村や都市近郊の環境が生き物の存在を無視して改変されてきたことによる。そうした日本の環境政策の欠陥に、小さなメダカが大きな波紋を投げたのである。

水田や水路、ため池なども、もとは人工的につくられた水域であるが、長い農耕の歴史とともにたくさん生物種を維持する場所になっていた。しかし、そうした身近な水辺にいる生き物に生態学が焦点を合わせることは決して多くなかったし、経済優先で進行してきた環境改変がどんな影響を及ぼしているか、明らかにされることも少なかった。水田生態系における生物多様性が話題になり始めたのも近年のことであり、その保全のための研究はこれからの時代に委ねられている。そうしたなか、身近な水辺環境を生態学から捉えていく手がかりとなるべく現れたのが本書「水辺環境の保全」である。その内容はまえがきにある言葉を借りれば、(1) 水辺にはどれくらい多様な生物=生物群集が生息するのか、(2) これらの生物群集がそこに生息できる、あるいは改変によって生息できなくなる理由やしゅくみはどのようなものか、(3) これらの理由やしゅくみから考えて、水辺の環境保全はいかにあるべきか、ということになる。身近な水辺の生物について、基礎生態から保全までを凝縮した話題がここに集められている。

本書は、編者を含む13人の著者が12の章を分担執筆しており、水生植物、トンボ、カエル、魚、鳥、二枚貝、水性昆虫など広い分類群をカバーしている。鳥類を主題にしている章は、「サギが警告する田んぼの危機」(藤岡正博氏)と、「河川の鳥類群集」(江崎保男氏)の2つである。前半の9章はすべて田んぼやため池、用水路など、水田周辺における話題で占められており、残り3章が河川に関係した内容である。このように、本書の大半が水田や農業に関連した内容であることは、書名からは想像しにくい。

水田にまつわる各章ではおもに、対象生物の分類、生活史、種ごとの生息場所の特徴などについての解説から始まっており、あまりなじみのなかった生物種についても一通りの基礎知識をつけることができる。身近な生き物のことだけに興味は広がり、田んぼを見かけたら、ついぞき込んでみたくなるかもしれない。続いて、生物が人為水系である水田やため池とどのように関わって生活しているかが語られる。多くの種に共通して重要となるのはやはり水の管理であり、農耕にともなう湛水、排水、乾燥といった変化が生物のくらしに大きく関係しているようすが理解できる。そして章末では、各生物にどのような危機が及んでいるかが指摘される。ため池や田んぼの孤立、放棄、水質の悪化、農薬、外来種の侵入、そして都市の拡大による水田環境そのものの消失といった数多くの原因が挙げられるなかでも、圃場整備はサギ、カエル、魚などを通じた大きな問題点になっている。圃場整備のもたらした水路と田面の段差、コンクリートの多用、乾田化などが、旧来の水田に生息していた生き物を圧迫しているのである。こうした問題点に基づいて具体的な保全策を提案している章もあるし、そうした時代の農業がどうあるべきかについての議論も「水田における生物多様性とその修復」(日鷹一雅氏)などで展開されている。水田生態系の保全計画をどう構築し、いかにして現実のものとするべきか、これからの盛んな議論と発展を必要とするところである。

後半3章は河川の鳥類、魚類、底生動物群集を扱っており、内容的にも前半とは異なった印象があ

る。前半では明確に現れることのあまり多くなかった「群集」からの視点が強調され、種数、種構成、ニッチ、食物連鎖などが織り込まれた話になる。多自然型川づくりの問題点への指摘なども見られるが、保全についての議論にはそれほど力点が置かれていない。そのため、前半9章とともにあるよりは、水田とは分けて別の本に仕立てても良かったかもしれない。その一方で、前半各章の議論や提言をまとめ、水田生態系における今後の研究や保全の展望を述べたあとがきか、それに代わるものが欲しい気がした。

時代を捉えて出版された本書には、水辺の生き物とその生息環境を知るための情報がたくさん詰まっており、これまでの、そしてこれからの環境改変の問題点を考える上で大変役に立つと思われる。メダカ危機のニュースに少しでも衝撃を受けた人には読むことを進めたい。(前田 琢)